

今日から 2 回にわたって、イエス様が愛読しておられたダニエル書を見て行きます。ダニエル書は、前半に記されている燃える炉やライオンの穴からの救いの出来事が有名ですが、これは後半の救い主の預言を鮮やかに示す型にすぎません。私たちはライオンの穴に入れられても恐れない強い信仰に憧れますが、ダニエル書の意図はそこではありません。克服することのできない理不尽な苦しみの中で与えられる神様の勝利を伝えています。

ダニエル書 7 章 1ー14 節を開きましょう。

1) 世の支配者は移り変わる

7 章で、ダニエルが幻で見た最初の光景は四つの生きものでした。これはバビロン以降に起こる四つの国を意味します。第 1 の獣はバビロン、第 2 はペルシャと考えられます。その後、翼の生えた豹のような生き物は、素早く襲い掛かり、地中海世界を制覇したギリシャのアレクサンダー大王のことだと考えられています。その次に鉄の歯を持つ、さらに強く恐ろしい獣が現れます。鉄の歯とは強大な軍事力のことで、この獣はローマ帝国の事だと考えられました。

しかし、ダニエル書の狙いは単なる未来予想ではありません。歴史上どの時代にあっても、この世界は何らかの人間の支配に置かれていて、苦しめる者と苦しむ者の対立の中にあります。今日の私たちも、理不尽な苦しみに会うことがあります。しかし、絶望する必要はありません。人間の支配は必ず終わりがあり、神様の勝利が与えられます。

2) 人の子が栄光を受ける

ダニエルの見た幻では、この第 4 の獣の時代に、王座が据えられます。そこに雪のように白い衣を着た方、「日の老いたる者」が座ります。この方は太初の前からおられる創造者、全能者です。全能なる神様が命の書によって、公正な裁きを行います。すなわち神の支配、神の国の到来を告げています。

この公正な裁きによって、第 4 の獣は燃え盛る火に投げ込まれ滅ぼされます。その他の 3 つの生きものは権力を奪われますが、定め時まで生かしたままに置かれるとあります。先のことはわからなくても理不尽な人間の支配はどれも「定めの時」までと言う限定された期間で、永遠ではないことが示されているのです。

幻ではそこに印象的な人物が現れます。「人の子」のような者です。この方は神様のご臨在を表す雲に乗り、全能者の前に進みます。そして権威、威光、王権を受けます。諸国、諸族、諸言語の民、つまりイスラエルのみならず異邦人も皆この方に仕えます。この方の支配、すなわち神の国は永遠です。決定的勝利です。

3) 「人の子」イエス様の登場

ダニエルの後、500 年ほど経ってローマが支配する時代、イエス様はお生まれになりました。その時イスラエルはどんな状況だったか、救い主はどんな存在と考えられていたかを見て行きましょう。

この時イスラエル民族は分断されていました。まず、バビロンを滅ぼしたペルシャの命令で、祖国に帰還を果たした主流派がいます。選ばれた神の民としてふさわしく歩もうとしたのは良かったのですが、やがて自分たちの努力で聖くなるとうとする、律法主義が生まれ、同時に完ぺきではない自分をうまく隠し、聖い顔を保とうとするようになります。こうして律法主義は偽善と一体化し、律法を利用して互いに裁き合うようになりました。宗教的シンボルの神殿によって既得権益をむさぼるカヤパやアンナスのような人がいて、社会の上層部を独占していました。その陰ではザーカイやマグダラのマリヤのように生活に困窮して、取税人や娼婦などになってしまい、迫害されている人がありました。

一方、帰還できなかった「イスラエルの残りの民」は、世界に散らばっていきました。これを流浪の民、ディアスポラと言います。ユダヤ教の主流派から見ると、ディアスポラは神に選ばれなかった、取るに足りない少数派でした。ダニエルはバビロンに連れ去られ、ペルシャのクロス王の時にも帰還できず、その地に残されたディアスポラの祖とでもいふべき存在でした。それで民衆には人気のあったダニエル書を、主流派の知識層はあまり重要視していなかったかもしれません。こうした社会構造の中では、ユダヤ教の指導者として救い主が現れるとの考えは、きわめて常識的でした。

そこにイエス様の登場です。主流派のユダヤ人教師たちにとって、この人が救い主とは到底考えられませんでした。なぜなら辺鄙なナザレの出身でしたし、取税人や娼婦を友と呼び、一緒に食事をなさいました。彼らの考える厳格な神様を「アバ=お父ちゃん」と子供のように親しげに呼びました。この人は祭司や律法学者の偽善を暴くたとえ話をしている。祭司の既得権益のドル箱である神殿の両替商を一掃した。彼らが何年もかけてようやく仕上げた壮麗な神殿を「私はこれを打ちこわして、新しい神殿を3日で建てあげる」と言っている。主流派にとってイエス様は鼻持ちならない男と見られるようになって行きました。

結)人の子の栄光は、苦しみの十字架

しかしこの方の最初の宣言は「見よ、神の国は近づいた」というダニエル書と同じ意味の言葉でした。その上、ダニエルが見た幻がイエス様と重なっていきます。生まれた時、異邦人の博士が世界の王と呼んで讃えたい。イエス様が変貌山で、「雪のように白い衣を着た方」に見えたと、漏れ出た噂に聞いて、主流派はとたんにダニエル書を気にし始めました。つまり、神様の救いは自分の努力で勝ち取ろうとする主流派ではなく、敵に支配され続け、理不尽な苦しみにさらされるダニエルの文脈に与えられたのではと気が付いたのです。「何？この男が、日の老いたる者=すなわち公正な裁きをする全能者とでも言うのか？」「そういえばこの男は自分を「人の子」と言っている。」「この男に敵対している自分たちの立場は誤りと見なされるのか？」祭司長、律法学者、パリサイ人らの不安と恐怖はボルテージを上げて行きました。

この恐れから、ついにイエス様はとらえられ、裁判にかけられました。あらゆる不利な証言に対して一切口を開かなかったイエス様が、たった一言「あなたがたはやがて、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に乗って来るのを見る」と仰ったのです。これはご自身がダニエル書7:13に示される栄光の救い主であるとの宣言です。この一言が、主流派にとってイエス様を十字架にかけ理由の決定打でした。「権威、威光、王権を受けるつもりか。面白い、栄光ではなく、十字架刑をくれてやる」と彼らは思ったことでしょう。

しかし、イエス様が「人の子」として神の右の座につかれる、栄光のお姿とは、他ならぬその十字架のお姿でした。滅びゆく民を救うために自らが犠牲となるのが真実の王の姿です。十字架でイエス様は「父よ、彼らをお赦し下さい。何をしているのか解らないのです。」と、敵対した律法主義者を執り成して祈られました。そして誰よりも酷い苦しみを生方イエス様が、この理不尽に勝利され、復活なさいました。

私たちは注意して考えなければなりません。自分の考えを正統派の意見で補強していると、少数派のダニエルの視点があることを忘れます。人を超越した神様を見失います。神様の計画を人間に理解できる小さなものにしてしまいます。そこに、予想しない形で真実が現れると、人間は保身のために、真理の方を滅ぼしてしまおうと考えます。これが正統派に身を置き、自己実現を神の心とすり替えている者の陥る過ちです。十字架が栄光とは程遠いと考えて、自分の過ちを正当化する、膠着した心です。なんと恐ろしいことかと思いますが、これは一部の人たちの過ちではなく、むしろ大多数の人の間違い、私たち全ての人間の罪です。

戦後日本のキリスト教を考えてみると、人数の拡大ばかりを目指していたように思います。人数の増加が教会の成功と考えられてきました。

私は以前、開拓して10年以上経つのに10名に満たない教会にいました。経済的に困窮し、牧師は燃え尽きて

何度も無牧となりました。何をやっても当たらないイベントに教会員は疲弊していました。その状況を見てついに、この教会を閉じるか存続させるかを、教派で話し合うことになりました。

人口の推移の分析から立地は適切だったか。こんなに長くなるのなら会堂を借りるより購入して返済するほうが良かった。外国の宣教師との相性が悪かった。伝道集会は有効だったか。盛況なゴスペル教室が伝道のパワーツールにならなかったのはなぜか。そもそもライオンの穴を恐れないほどの信仰はどこへ行ってしまったのか...成功の理論で考えれば考えるほど、この開拓は失敗だと思われました。結果は、マイナス常態としか見えないこの教会は一度なかったことにして、もっと良い方法でやり直すということになってしまいました。

しかし、振り返ると失敗と決めつけたこの時のこの教会で、失望することは多かったけれど、なぜか絶望してはいませんでした。苦しい状態の中で、教会学校も、礼拝とお昼の交わりも、祈禱会も守られて、一度も休みになったことはありません。愛し合う兄弟姉妹の交わりは暖かく、教会は主のみ体であることを味わいました。み体として十字架の痛みを知っている教会。そこに人間の成功はなかったけれど、十字架の主の栄光は確実にあったのです。

実際にはそれから 15 年以上経つ今もこの教会は存続し、人間が不可能と思う時にも守り抜いてくださる神様を証しています。

21 世紀も 20 年を迎える今、多数派の理論は行き詰まりを見せています。それでも教会の大小で、評価する風潮は残っています。こうした人間同士の裁き合いが、十字架の主の栄光を見えなくさせています。

今こそダニエル書を読みましょう。信仰の強い人としてダニエルを讃えるのをやめましょう。未来予想図として人間が分析した成功法は時に間違えます。私たちが苦しみに置かれるのは、神様の計画の範囲の中であって、その期間は限られています。主よいつまでですかと訴えて良いのです。苦しみをもたらす人間の支配は必ず終わります。変わることはない救い主にすがりましょう。イエス様はインマヌエル、共にいてくださる神です。主は十字架で、私たち全ての人間の罪を滅ぼして勝利を与えて下さいます。苦しみの十字架こそイエス様のお姿です。復活こそキリストの栄光です。

祈り

神様。私たちは主流派の中にと安心します。しかしそこには大きな罫もあります。拡大志向や上昇志向、成功物語に目を奪われて、困難の中に表されている神様のご計画を見失います。十字架の痛みを軽んじて、主流派にいる自分を守ろうとします。

その私たちこそ、「何をしているのか解らないでいる者」です。イエス様が私たちを憐れんで祈り、十字架と復活による贖いを与えてくださったことを感謝します。あなたの十字架の中にだけ、栄光を見出だす者としてください。

栄光の主、人の子なるイエス様のお名前でお祈りします。アーメン